

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話:070-1503-6401、044-988-0004

<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>

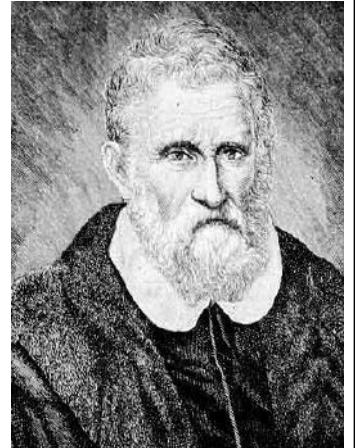
第94号

外国人が知っていた「日本」とは (2) =中世(鎌倉時代)=

====初めて日本を紹介したのは隣国、中国であった====

13 世紀、日本を「チパング」の名称でヨーロッパに初めて伝えたのはマルコポーロという人物でした。

彼は 1254 年イタリアのベネチアで東方貿易商人(アジア方面の国々と交易を行う商人)の家に生まれました。1271年、ローマ教皇グレゴリウス 10 世から元朝皇帝宛の信任状を得た父と叔父に同伴して東方への旅に出ました。1274 年頃、当時アジアを席卷していたフビライハンの治める元朝の大都(現在の北京)に到着します。その後、16~17 年間、元に滞在し、その間、各地を歴訪したようです。1295 年、ベネチアに戻り、後、ジェノバ軍に捕らえられ、獄中で見聞した事柄を筆録したものが有名な「東方見聞録」でした。そして、その中に「チパング」(日本)が登場してくるわけです。



マルコ・ポーロの肖像画

それでは、「チパング」とはどのような意味を持った言葉だったのでしょうか。中国では紀元前後頃、日本を「倭(わ)=中国語で日本人を軽んじて呼んだ称で、従順な未開人という意」と呼んでいました。その後、日本は 7 世紀後半から 8 世紀初頭にかけて国家としての威信を示すため、国号を「日本」に変えたものと考えられます。

しかし、古い日本の資料には「チパング」なんて文言はどこにも見あたりません。じつはこの言い表し方は、中国語の「日本国」の発音「ジーベンゴォ」(現在は「リーベンゴォ」)からきたものです。漢字が日本に伝わった時代によって「日」は「ニチ」(漢音=奈良~平安時代に伝来)と読んだり、「ジツ」(呉音=奈良時代以前に伝来)であったりと読み方が違うのはそのためなのです。「ジーベンゴォ」はたぶん奈良時代以前の発音だと思います。それがやがて「チパング」や「ジパング」「ジャパン」に変化します。

それでは、「東方見聞録」の日本についての記述を見てみましょう。「住民は色が白く、文化的で物資に恵まれている。偶像を崇拜し、どこにも属せず、独立している。黄金は無尽蔵にあるが国王は輸出を禁じている。しかも大陸から非常に遠いので、商人もこの国をあまり訪れず、そのため黄金が想像できぬほど豊富なのだ。この島の支配者の豪華な宮殿について述べよう。(中略) 宮殿の屋根はすべて黄金でふかかれており、その価格はとても評価できない。宮殿内の道路や部屋の床は、板石のように、四センチの厚さの純金の板を敷き詰めている。窓さえ黄金でできているのだから、この宮殿の豪華さは全く想像の範囲を超えているのだ」と記されています。この情報を聞いた元の皇帝フビライが、この国を手に入れたいと考えるのは当たり前の事です。この記述の後には、しばらく日本の攻略、すなわち「文永・弘安の役」(1274・1281 年)の話となってきます。次に「バラ色の真珠も多量に産出する。(中略) この国では死体は土葬されることもあるし火葬されることもあり土葬するときには真珠を口の中に入れる習慣になっている」との記述ですが、この当時の日本では一般的には土葬が中心ですが、仏教との関係で、ある程度の身分のあるものが火葬をおこなって骨は骨臓器に入れ、埋葬していました。川崎市でもいくつか発掘されています。

「東方見聞録」の内容は、誇張や単なる噂話に近いものも見られますが、黄金伝説は、確かに当時、岩手・宮城県の北上川流域の砂金の産出や、中尊寺金色堂などもあり、日宋貿易で日本の情報が中国に流れる事は十分ありますので、全く嘘ではなさそうです。

やがてこれらの情報は 15~17 世紀に起こった大航海時代の幕開けにも影響し、新大陸発見にもつながっていきます。(文:板倉敏郎)



1570 年発行のオルテリウス世界地図 右上端が日本

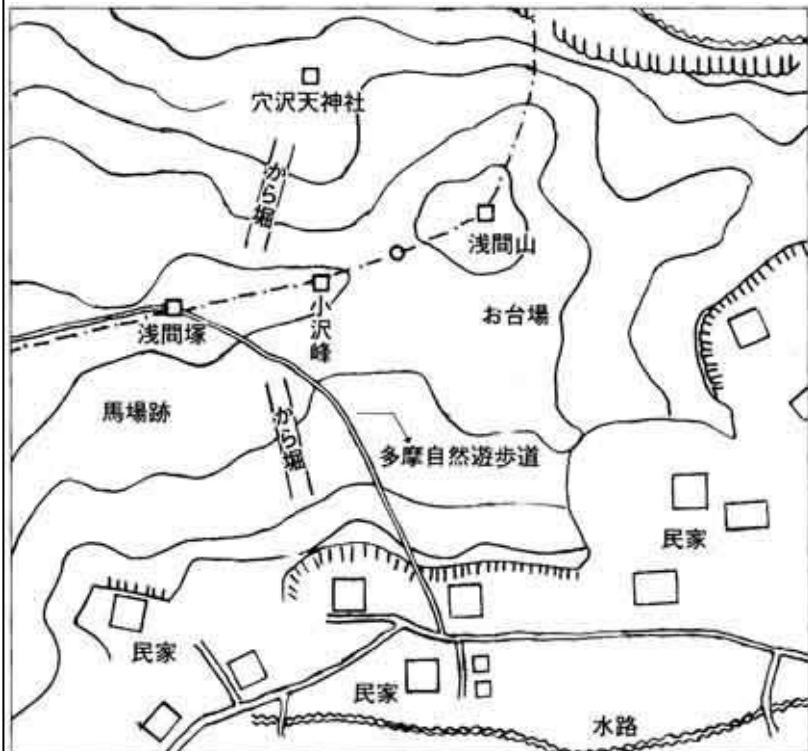
シリーズ

「麻生の歴史を探る」 第64話

小沢城 (1)

小島 一也 (遺稿)

麻生区の高石・細山・金程・向原の地は、中世「小沢郷」に属し、その中心が現多摩区の菅から稲城市矢野口にわたる地域で、そこには菅・矢野口から百村・坂浜にかけて広域な「小沢城」と呼ぶ、標高最高87m程の山城がありました。



小沢城址見取図



小沢城址遠望

このことは前稿(28話)で稲毛三郎の子小沢小太郎重政の居城と触れましたが、その後鎌倉・室町となって2~300年、足利、北条氏の時代、この小沢城は戦国の憂き目にあうこととなります。現在この小沢城址は川崎市によって保存され、読売ランド駅前からも「多摩自然遊歩道」で訪れられます(約40~50分)が、現地は稲城と菅にまたがる峰が多摩川に突き出した多摩丘陵の地勢を活かした要害で、今でもこの地には城下、馬場などの小名、そして小沢峰、天神山、浅間山などが通称地名で残されています。

伝承によると、この小沢城は8回の実戦を繰り返したといえます。初回は元弘三年(1333)新田義貞の鎌倉攻めの際、鎌倉北条軍が分倍河原に布陣した際の戦で、北条傘下の小沢城は落城、この折、城下(菅)の名刹法泉寺の薬師堂や、細山香林寺所縁の寿福寺などが放火の憂き目にあっております。次の戦は日本史で謂う「中先代の乱」で、義貞によって北条高時は自刃し、鎌倉幕府は滅びましたが、翌建武元年(1334)高時の遺児時行が信濃国で兵を挙げ、関戸の渡しから多摩川を越え、当時この地方に勢力を持っていた足利勢が拠る小沢城を撃破、勢いに乗じて鎌倉まで占拠してしまいます。史誌によるとこの戦の背景には足利氏専制を喜ばぬ勢力があり、京都にいた尊氏は允許も得ず軍勢を率い鎌倉を奪取、時行軍を滅亡させますが、これが歴史に残る「南北朝」の始まりと言われ、それにしても、小沢城やこの地方にしてみれば、とんだ被害を被ったということになります。

だがこの時期、小沢城を含むこの地方の被害はこれだけでは済みませんでした。そのわずか17年後の正平六年(1351)、足利尊氏、直義兄弟の不和は足利幕府内紛の戦となります。征夷大將軍となった尊氏は室町幕府を樹立、鎌倉には東国の押さえとして鎌倉公方を置きますが、義直は鎌倉にあってこの地方を領有、小沢城に軍勢を集めていましたが、尊氏の直義攻めに関東の多くの武士は尊氏に味方し、多摩川を渡り府中に押し出した直義を打破、小沢城、関戸城(小沢の属域)焼き払ったと伝承されています。この時尊氏が鎌倉に直義を攻めた戦道が前稿第40話で述べた尊氏伝承道です。この戦では小沢郷、麻生郷の全域が戦塵を浴びているようです。

直義は死に尊氏も没し、鎌倉公方は在るものの幕府は京都に移り、南北朝の争いは遠い都でのこと。この地方は再び安穏な年月に戻ります。王禅寺の等海上人の禅寺丸柿奨勸が応安三年(1370)。下麻生木賊不動の建立が応永七年(1400)。前数稿で紹介した麻生の寺院シリーズで述べたように、農民の間に浸透した新しい仏教思想が、この地方に多くの寺院を生み出したのもこの頃でした。

しかし、その平和な安穏は何年も続きませんでした。尊氏が残した鎌倉公方という置き土産は、関東管領を争う動乱となり、再々度小沢城を戦禍の中に巻き込んでしまいます。

参考文献:「菅町会60年記念誌」「川崎市史」「川崎地名辞典(下)」

シリーズ

時間と時計の話 第1部

和時計と西洋時計(9)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

◆田中儀右衛門の時計◆

飯塚伊賀七の外に、幕末の日本には、もう一人からくりの天才技術者がおりました。明治維新後に、田中久重と名を改めますが、「からくり儀右衛門」として親しまれた、久留米出身の田中儀右衛門です。

儀右衛門は、1799(寛政 11)年に久留米の鼈甲細工師、田中弥右衛門の長男として生まれました。幼い頃からからくりの才能を発揮し、寺子屋の先生や仲間たちを驚かせて喜んでいたので、早熟な天才だったようです。10代後半には、地元の五穀神社の祭礼にあわせて、当時流行のからくり人形の新しい仕掛けを次々に考案して、大きな評判を得ています。そんな儀右衛門は、将来にわたって発明を続けるための資金作りを計画し、からくり人形的一座を作って、九州各地から始めて、大阪、京都、江戸など全国を行脚、大変な評判を呼びました。特に評判を呼んだからくり人形は、「弓曳き童子」と「文字書き人形」の2作品で、2体とも当時のからくり人形の最高傑作とされています。

天保年間(1830年～)に入ると、各地で藩政改革が行われるようになり、儀右衛門一座のからくり興業も難しくなります。時代の空気を感じ取った儀右衛門は、実生活に役立つ実用品の製作と販売に舵をきり、1834(天保 4)年に大阪に移り住みます。この時期の傑作が真鍮製の携帯用懐中燭台です。夜間の帳簿つけに便利だと、商人たちの間で大評判となり、夜間の医療現場でも広く使われるようになりました。しかし好事魔多し、1837(天保 7)年2月の大塩平八郎の乱によって、大阪市街は一面の焼け野原となり、儀右衛門の住まいも跡かたもなく焼け落ちてしまいました。大阪を離れて京都に移り住むことにした儀右衛門は、ここで「いつまでも消えない灯り」と称えられて、商人たちにもてはやされた「無尽灯」を発明しています。空気の圧力を利用し、菜種油が管を伝って灯心に上る仕掛けは、長時間安定した灯りを供給することを可能にし、学者仲間にも高く評価されました。



田中儀右衛門作 須弥山儀(しゅみせんぎ)

40代にして、なお向学心旺盛な儀右衛門は、南蛮貿易で齎される西洋時計に強い興味を示し、親しくなった学者仲間との紹介で、西洋の天文・数学を学ぼうと、1847(弘化 4)年 49歳にして天文暦学の総本山「土御門家」に入門して、その道を極めます。2年間の修行を経て一流の技術者のみに賦与される「近江大掾(おうみだいじょう)」を名乗ることを許されます。はれて京都で「機巧堂」という店を構えた儀右衛門は、ここで様々な機械や高級時計を製作します。和時計の最高傑作と言われる須弥山儀(しゅみせんぎ)はその一つです。仏教の宇宙観を一つの時計の中に表現した名品とされるこの時計は、現在東向島のセイコーミュージアムに展示されています。

50歳を超えてなお向学心に燃える儀右衛門は、蘭学者の廣瀬元恭が営む「時習堂」に入門、医学・物理学・化学・砲術など西洋の科学と技術を学び、その吸収に努めました。こうして完成したのが、儀右衛門時計の不朽の名作と

言われる「万年自鳴鐘」略称「万年時計」です。1851(嘉永 4)年に完成したこの時計は、6つの面を持ち、1面は西洋時計、1面は和時計、さらに曜日、旧暦の日付、月の満ち欠けなどが表示される優れ物でした。特に和時計の部分は、季節によって昼夜の長さの異なる不定時法に対応して、季節ごとに文字盤の間隔が全自動で動く仕掛けまで工夫されていたのですから驚きです。この時計も現存し、現在は国立科学博物館に展示されています。儀右衛門の時計には、他に時間ごとに太鼓が打たれ、鶏が時を告げる「太鼓時計」などがあります。

ペリーの来航を経て、幕府が開国を決定すると、儀右衛門は佐賀藩に招かれ、藩の精錬所の技師長に就任、ここでも様々な発明をしています。69歳で明治維新を迎えた儀右衛門は久重と名を替え、1873(明治 6)年に東京に出、2年後の明治 8年、銀座に田中製作所という日本で初めての民間機械工場を立ち上げます。現代日本を代表する大企業の一つ東芝の前身です。儀右衛門の娘婿 2代目久重は、手狭になった社屋を芝浦に移転し、社名も芝浦製作所に改めます。この会社が後に東京電気と合併して、東京芝浦電気となり、社名変更で東芝となったのです。(第1部完)



儀右衛門の「万年自鳴鐘」(1851年の作)

募 集

柿生郷土史料館 第4回史跡見学バスの旅

小江戸 川越を訪ねて

日 時 2016 年 4 月 20 日(水)

行 程 : 川越城本丸御殿 川越市立博物館 蔵造り資料館 (昼食)
小江戸散策(時の鐘 菓子屋横丁、蔵造りの街並み 大正ロマン夢通り)
喜多院 東照宮 新河岸川船着き場 伊佐沼 河岸街道 平成の鐘など

集 合 : 7時 45 分 新百合丘駅北口

出 発 : 午前8時

解 散 : 午後 6 時 30 分頃

(新百合丘駅北口 → 柿生駅付近)

募 集 : 42 名(先着順 定員になり次第締め切ります)

費 用 : 約 7500 円(詳細未定につき 概算です)

申し込み : 3 月 25 日までに往復はがきに必要事項(郵便番号、住所、氏名、年齢、連絡先電話番号、参加者全員の氏名と年齢)を明記して、

柿生郷土史料館(住所は1面トップ参照)宛に申し込んでください。

問合わせ : 担当 小林基男(電話 080-5513-5154 044-989-0622)



蔵造りの街並み

柿生郷土史料館 3・4 月催物案内 【入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

3月 6・20・27 日(毎日曜日) **4月** 2・9・16・23 日(毎土曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時 (3月13日、4月30日は休館です)

第10回 特別企画展

新聞で見る近代日本の歩み展(3)

～ 関東大震災と横浜・川崎 ～

大正 12 年の関東大震災から 93 年を経て、震災の生の記憶が薄れてきました。そこで、当時の新聞報道から、被害の程度や対応を含めて、震災の様子を再現します。

期間: 2 月 27 日 ～ 5 月 15 日 会場: 柿生郷土史料館特別展示室

第60回 カルチャーセミナー

天保の飢饉と王禅寺村名主志村家の救済活動

志村家に残された多くの古文書を紐解き、江戸後期の柿生一帯の領主と農民の関係がどのような状況にあったのか、その変遷を探ります。

講師:岩橋 清美氏 (国文学研究資料館 古典籍共同研究事業センター特任准教授)

日時:3 月 20 日(日) 午前10 時～ 会場:柿生郷土史料館特別展示室

ついに完成!

ふるさと柿生の記憶を DVD 化

第1弾

「身近にあった信仰の世界と人々の思い」

◆◆◆晩秋の上麻生「秋葉講」を訪ねて◆◆◆

ご希望の方にはおわけしております。詳しくは史料館までお問い合わせください。